

# 名誉顧問のコモンセンス

## 茄子の味 その1:熟字訓

### 「日本第一」



#### 茄子を食べる：その1「ジャパン・ファーストと外国人力士の四股名」

あるとき、報徳先生は茄子(なす)を食べていました。ふと、首をかしげました。

其の味、常に異なり、恰(あたか)も季秋(きしゅう:秋の時期)の茄子の如し。箸を投じて歎じて曰く — 「今時、初夏に當れり。然して此の物、既に季秋の味をなすこと豈(あに)に唯ならんや。是を以て考ふるに、陽発の氣薄くして陰氣既に盛なり。何を以てか米穀・豊熟することを得ん」。【『報徳記』52頁】

今は初夏なのに、茄子に秋の味がするというのです。これは大変です。先生は、「今年は、穀物や野菜や果物が生長する夏の時期が来なくて、直ぐ秋になる予兆だ」と感じたのです。それで、村々に命じて、「凶荒が来るぞ。飢饉に備えて、米穀ではなく稗(ひえ)を蒔け！」と伝えました。そのおかげで、この村の百姓たちだけがこの秋の飢渴から免れることができたのです。

**茄子の味** 二宮金次郎報徳先生の『報徳記』や福澤諭吉翁の『学問のすゝめ』を読んで

いて、ときどき「秋茄子の味」を覚えます。どことなく、その文書から「飢餓」を予感するのはです。いま、幸せに生きているこの毎日に、時に、未来への不安を覚えるのです。報徳先生と論吉翁が問題として採り上げた当時の世の中の不満や不安を、この現代で同じ不満と不安として感じるのです。春(現代)に、秋茄子(不安の未来)の味がするのです。その時に思ったことを「茄子の味」としてホームページに連載を書くことにしました。

## 外国人力士の四股名

**殊勲賞は玉鷲** 今年の相撲の名古屋場所は、まれにみる素晴らしい取り組みが多く、世間を興奮させました。横綱になったばかりの大の里の初土俵でもあり、会場も新しく新装なった名古屋のアリーナの柿落としてもありました。新横綱の大の里の活躍が期待されましたが、千秋楽ではすでに4敗して優勝戦線からは離脱。千秋楽は、勝ち残った平幕の三人で優勝が争われました。勝負は、のっけから琴勝峰が安青錦を破って13勝2敗の成績で初優勝を果たしました。平幕の力士の優勝は去年春場所の尊富士以来8場所ぶりの快挙です。日本人力士の優勝かどうかは、あまり話題になりませんでした。それよりも、殊勲賞は40歳の玉鷲が受賞して最年長記録をつくり名を挙げました。玉鷲はモンゴル出身。年寄名跡の襲名には日本国籍が必要なので帰化しています。

**「安」の字は余分** 惜しくも優勝を逃した安青錦は、技能賞に輝きました。ウクライナ出身の東前頭筆頭で21才。四股名(しこ:相撲すもうの力士の呼び名。「四股:しこ」は古語で強く頑丈の意で「四股名」は当て字)の「安青錦」は「あおにしき」と読みます。「あお:青」は母国の国旗の色なのでしょう。でも、どう見ても「安青錦」のこの最初の「安」の字は日本語としては変です。「あ・あお・にしき」と読んでしまいます。安青錦は「安治川部屋」の所属なので、それをわざわざ強調して現すために「安」の字を入れたのです。無理に入れたので、変な名前になりました。今回優勝した「琴勝峰」の「琴」もそうですが、所属する佐渡ヶ嶽部屋伝来の「琴」を付けたものです。お店の商号みたいなものです。それで、名前の由来は、師匠の四股名の「琴」、母親の名前から「勝」、さらに上を目指すという意味で「峰」であるということです。それで、「こと・しょう・ほう」と読みます。でも、「琴勝峯」とは変な名前です。この三つの漢字は三字ともお互いに関係なしです。「玉鷲」や「大鵬」や「霧島」などは綺麗で堂々として良い名前です。琴は屋号だとしても、「琴が勝って峯になる」とは一体どうなってるのでしょうか。「安青錦」のこの「安」も、実は、「安青錦」は「安治川部屋」の所属で、それで「安」の字を付けたのです。安治川部屋は元関脇・安美錦が再興したものなので伝統ある名前です。

**日本語の訓読み** でも、実は、この「安」を加えるのは日本語としては変でもなんでもないのです。日本語の漢字の読みは、常に、二通りあるのです。漢字は、元々、中国から来たもので、まずは「中国語読み」で読みます。「山」は「サン」です。「蓬莱山」や「富士山」は「ホウライサン」「フジサン」と読みます。これを、漢字の「音読み」(おんよみ)といいます。また、同じ「山」でも、相撲の四股名の「双葉山」は「フタバヤマ」で、「羽黒山」は「ハグロヤマ」で「山」は「ヤマ」と読みます。これは、漢字の日本語読みで「訓読み」(くんよみ)といいます。たとえば、「明後日」という言葉があります。漢語では「みょう・ご・にち」と「音」(おん)で読みます。日本語の「訓読み」では「あさって」と読みます。「明」を「あ」、「後」を「さっ」、「日」を「て」と読む訳ではありません。「明後日」全体で「あさって」という意味だということです。「安青錦」のこの「安」も、所属している相撲部屋安治川部屋の「安」で飾ったので「あおにしき」が読み癖でいいのです。

**「熟字訓」** このように日本語で作った漢字には、常に、「音読み」と「訓読み」の二通りの読みがあるのです。それは、許されているのです。「安青錦」と書かれていても、「あおにしき」と理解した上で「訓読みだ」と納得して読めば良いのです。この臨機応変の漢

字の読み癖は普段「宛字・当て字」(あてじ)といいますが、日本語の専門的な文法用語では「熟字訓」(じゅくじゅん)といって使用を大ぴらに承認しています。生活に密着した言葉「欠伸」(あくび)や「胡坐」(あぐら)や「従兄弟」(いとこ)や「自惚れ」(うぬぼれ)をはじめ、植物の「紫陽花」(あじさい)や「牽牛花」(あさがお)や「無花果」(いちじく)や「万年青」(おもと)、魚の「海豹」(あざらし)や「海胆」(うに)、鳥の「信天翁」(あほうどり)や「善知鳥」(うとう)などなど、日常的によく使われる言葉は「熟字訓」が多いのです。「安青錦」の当て字も、立派な「熟字訓」なのです。

**撲(なぐ)る相撲** 「相撲」という漢字もそうです。「相撲」はどう見ても、「スモウ」とはよめません。『相撲』は元々は、サンスクリット語の『ゴダバラ』を『相撲』と表記していた。後に日本語の『争い』『抵抗』などを意味する日本語(大和ことば)の動詞である『すまふ』に当てはめられ、やがて『すまひ』の名詞に変化し、のちに音便化していまの『すもう』になった」と『日本大百科全書』には書いてあるそうです。この説明では、「ゴダバラ」が音読みなのか、訓読みなのかよく分かりません。また、「大和言葉で争いや抵抗だ」と言われても、「すまふ」や「すもう」そのものが、余りなじみのあることばではありません。でも、「撲」は「ボク」と読み、「撲＝ボク・うつ・なぐる：音を立ててうつ・たたく：撲殺・撲滅・打撲」だという意味は分かります。「スモウは喧嘩だ!」と外国人の力士が言ったのもあながち間違いではありません。英語の「レスリング」(wrestling)の「wrestle」は「組み打ちする・とっ組み合う・全力を尽くしてとり組む・戦う・苦闘する」という意味だそうです。

**難解な日本語** 私は、外国人をからかうのに次のような問題を出します。

次の「日」のついた漢字すべてに、それぞれ違った「日」の読みのフリガナを付けなさい — 「昨日と違って、今日、一日は祝日で、明日の二日は日曜日。日本ではお休みの日で、日本晴れなら、庭で天日に当たります。明後日は日向の国の春日神社へお参りに行きます」。

答は — 「①昨日(きのう)と違って、②今日(きょう)、③一日(ついたち)は、④祝日(しゅくじつ)で、⑤明日(あす)の⑥二日(ふつか)は、⑦日(にち)⑧曜日(び)。  
⑨日本(にっぽん)ではお休みの⑩日(ひ)で、⑪日本(にほん)晴れなら、庭で⑫天日(てんぴ)に当たります。⑬明後日(あさって)は、⑭日向(ひゅうが)の国の⑮春日(かすが)神社へお参りに行きます」。

同じ一つの文字(「日」)を15通りに、いやそれ以上に読み分ける国語など、他のどの国にあるでしょうか。これで、ほとんどの外国人は日本語を学ぶのをあきらめます。(笑い)

**秋刀魚の味** このように、日本語には「音」と「意味」の二つの機能が同時にあって、一つの「言葉」を作っています。自動車にはブレーキとアクセルの機能がありますが、二つのペダルに分かれています。同時に踏むことはありません。日本の漢字も、音と意味との二つに分かれています。ここでは同時に機能するのが素晴らしいところです。日本人は、これを巧みに使い分けます。物と言葉のイメージが、倍、豊かになります。「秋刀魚」(さんま)などは、きれいな漢字(イメージ)と意味(実物)で、二度美味しくなります。





## 「七」に置くよ これも、「熟字訓」のお話 ―

熊さんが家に帰ってきたら框(かまち:入り口)にハっさんからの手紙がありました。「ハちの奴、最近字を覚えたので用件を手紙に書いて置いていったな。どれどれ」と読んでみると「かりたはおりわ七におくよ はち」。熊さんは慌ててハちのところへ飛んでいきました。「おいおい、人の大事な羽織をヒチ(質屋)に置くとはどうゆう了見だ」と怒ると、「羽織はちゃんと棚(たな)に置いてあるよ」とハち。「だが、七と書いてあるぜ」「あれは七夕(たなばた)のタナと読むんだ」とハっあん。

時にはこう言った誤解や混乱を招くことがあります。が、「安青錦」の「安」の字は、「意味がない熟字訓で、日本語にあっては、漢字からなる単語に単字単位ではなく熟字単位で訓読み(訓)を当てたもの」なのです。ここでも、「音」と「意味」が錯綜しています。

**移民摘発禍** いま、茄子の味がしているものに、「アメリカ・ファースト」と「ジャパン・ファースト」があります。どちらも、一般の国民には受けが良いのですが、差別や格差の感じが強く、心ある世間の人たちの評判はよくありません。特に、労働者として外国人を雇っている企業では、彼らを腫れ物に触るように差別や格差を感じさせないように扱っています。ある日の新聞に次のような「アメリカ・ファースト」関連の記事が載っていました。これこそ、「秋茄子の味」です。

トランプ米大統領が全米の職場で進める移民摘発の一環として建設現場でも移民捜査が行われ業界に大きな混乱をもたらしている。アラバマ州のある建設現場では移民・税関捜査局(ICE)による逮捕を恐れて労働者のおよそ半数が数日間出勤せず工期は3週間遅れる見通しだ。シンクタンクによると米国に無許可で滞在している推定1100万人のうち約140万人が建設業に従事しておりどの業種よりも多い。多くの米国生まれの労働者には必要な技能を持っておらずこうした労働者の代替は困難だという。

**和気藹々の共同体** その点、日本の相撲は、外国人も日本人も和気藹々(わきあいあい)で仲よく戦っている珍しい「共同体」です。一番強い横綱の一角にモンゴル人の豊昇竜がいるのはその象徴です。四股名をみただけでは、外国人か日本人かは分からないようになっています。でも、「馬」の名の付く千代翔馬や王翔馬はモンゴル出身であることはわかります。これは、ご愛敬です。

## 学者 勉(つと)ざるべからず

**大谷選手の場合** 日本の相撲界と違って、アメリカの大リーグLMBで活躍する大谷翔平選手も、時には、アメリカ人たちから心ない非難が浴びせられています。これについて、論吉翁の『学問のすゝめ』のなかに、ピッタリの論説があります。『中津の旧友に贈る・第十編』(94頁)がそれです。これは、幕末時に外国人を雇い入れることについて、日本人がその必要性を正しく評価して、その意義を全うすることを喚起した文章です。特に、日本の学者をはじめ当時の指導者たちの注意を喚起するために、かれらに向かって述べたものです。「あなたたちが未熟なのでしばらく替わりに雇ったのだ。しっかり彼らから学んで、彼らと激しく競争して、百般の事業を見事に行うようになりなさい」と叱咤激励したのです。愛国心溢れる見事な弁論です。むろん、LMBと大谷との役柄は全く正反対で、この場合、大谷がお雇い外国人で、LMBが雇う側です。「ピッタリだ」といったのは、

攻守・所を変えて、立場を違えれば、雇う方と雇われる方との双方の思いはここに書かれたことと同じだと言う意味です。ここでは、日本(大谷選手)と外国(アメリカの大リーガー)を入れ替えてお読みください。

今我国内に雇い入れたる外国人は、我が学者未熟なるが故に、暫くその名代を勤めしむる者なり。今、我国内に外国の器品を買い入るは、我国の工業拙なるが故に暫く錢と交易して用を便する者なり。この人を雇い、この品をかうがために金を費やすは、我學術の末(いま)だ彼に及ばざるがために日本の財貨を外国へ棄つることなり。国のためには惜しむべし。学者の身となりては漸(は)すべし。且つ、**人として前途の望みなかるべからず**。望みあらざれば世に事を勉(つと)むる者なし。明日の幸を望んで今日の不幸をも慰むべし。来年の樂を望んで今年の苦をも忍ぶべし。昔日は世の事物、皆、旧格に制せられて有志の士と雖も望みを養うべき目的なかりしが、今や然らず。この制限を一掃せしより後は、あたかも学者のために新世界を開きしが如く、天下、処として事をなすの地位あらざるはなし。農となり、商となり、学者となり、官員となり、書を著し、新聞紙を書き、法律を講じ、芸術を学び、工業も起すべ、議院も開くべし、百般の事業行うべからざる者なし。然もこの事業を成し得て国中の兄弟(けいてい)・相聞(あいせめ)ぐに非ず。その智慧の鋒(きさき)を争うの相手は外国人なり。

この智戦に利あれば、則ち我が国の地位を高くすべし、これに敗すれば我が地位を落すべし。その望み、大にして期するところ明らかなりと言うべし。固より天下の事を現に施行するには、前後・緩急あるべしと雖も、到底この国に欠くべからざるの事業は、人々の所長(しょちょう)に由って今より研究せざるべからず。苟も処世の義務を知る者は、この時に當ってこの事情を傍観するの理なし。**学者勉めざるべからず**。

**怨望の巷** この文章は、文化的・文明的には劣っている日本の学者や指導者たちを鼓舞するためのものです。論吉翁の謙虚な立場と誇り昂ぶる外国の文明人との関係に於いて書かれたものです。むろん、大リーグの話に合わせると、いま、未開発の日本から本場のアメリカへ出向いた若き野球の天才選手とそれを迎え撃つ大御所が乱立するプロ集団の立場とは全く反対の側になっています。返って、攻守所を変えての論調だけに大いに皮肉に感じられ、また、大いに学ぶべきところがあります。それは、まず、この論吉翁の謙虚さです。いまのアメリカの尊大な大リーガーたちや経営陣には、このお雇い外国人(大谷選手)に対する謙虚さはファールチップほどもありません。大リーグは、まさに、自我とうぬぼれがせめぎ合う「怨望の巷」(えんぼうのちまた:焼き餅の盛んな場所)に他なりません。これが、現在の「アメリカ・ファースト」の実体です。今のアメリカには、この尊大さを諫(いさ)める論吉翁が一人もいません。多分に指導者としての天分を持ったお雇い選手の大谷翔平こそ、哀れです。「アメリカ・ファースト」は、自国民の間に分断と差別を助長する間違ったスローガンです。日本の政治家たちがそれを修正せず、そのまま真似て「ジャパン・ファースト」を用いているのにおおきな不安を覚えます。「日本第一!」「日本唯一!」「日本最高!」 — この「訓熟語」には、季節外れの茄子の味がします。

## 嬉しい出来事二つ

でも、世の中、少々、違ってきました。特に、大谷選手の周りは「アメリカ・ファースト」ばかりではありませんでした。今日(2025/08/01:日本時間2日)のレイズとの試合で、二つの感動的な事件が起きました。

### バット折れ事件

レイズ対ドジャース(タンパ)。ドジャースの大谷翔平選手は「2番・指名打者」で先発出場。3回1死の第2打席はバットをへし折られながら二塁内野安打。折れたバットが二塁手の手前まで飛び内野手がボールにチャージできない珍しい当たりだった。大谷の安打は3戦ぶり。レイズ先発右腕バズとこの日2度目の対戦。1ボール1ストライクからボール気味の外角チェンジアップをスイング。バットを折られボテボテの当たりだったが快足を飛ばして一塁セーフ。折れたバットに当たる可能性もあった二塁手ブランドン・ロウを気遣い一塁上で左手を出してジェスチャーを送った。その駆け抜け直後に大谷はロウの方を見ながら左手を上げ「大丈夫か」と気遣う仕草を見せた。自身3試合ぶりのヒットにもかかわらずベースコーチとのセレブレーションよりも先に相手選手への配慮を優先した形だ。



この左手を上げて、「ゴメンネ！」のあいさつは、卓球やテニスでのネット・ボールをしたときのエチケットと同じです。特に、丁寧でも、立派でもありません。でも、野球では珍しいのです。

試合後の二塁手ブランドン・ロウの記者会見 — 「あの打撃にはびっくりしました。聞いたこともない音でバットがこっちへ飛んできて恐怖を覚えました。試合後に翔平と話したのですが、翔平がボールを打って球がこちらへ飛んできたときに彼は一塁に向かいながら僕の方を見て手を上げてきたんです。その瞬間、ああ、僕のことを気遣ってくれているんだと直ぐに分かりました。なんて良い奴なんだろうと思いました。そのあと彼はうなづくようなジェスチャーをしてきたんです。それは、日本のお辞儀といって、相手に敬意を表し、謝罪の気持ちを表現する美しい日本文化の仕来りだそうで、謝罪の気持ちを現すもの。そして、僕の肩に手を置いて、「大丈夫だった？ 本当にごめんね」といったんだ。あんなに激しい試合の最中に、相手チームの選手のことをそこまで気にかけるなんて……。ハリケーンでぼくたちの本拠地は破壊されました。チームにとってもファンにとってもとても辛いことでした。でも今日この仮設の球場で信じられないことを目の当たりにしたのです。レイズファンたちが大谷コールをしていたのです。翔平



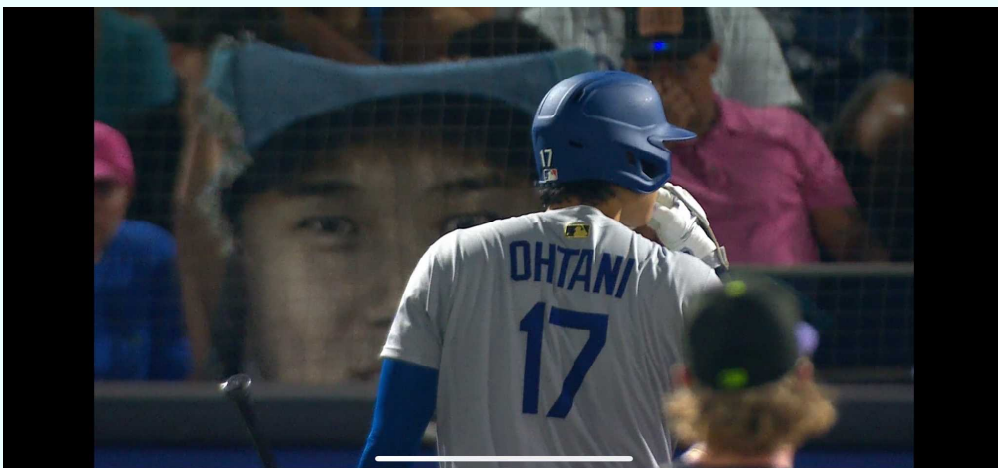
の顔がプリントアウトしたブランケットを掲げている女性もいました。敵チームの選手に対して、これほどまでの愛情と敬意を表するなんて……。大谷コールが球場に響き渡る毎に胸が熱くなりました。試合には負けました。でも、こんな気持ちのいい野球は初めてでした。**野球って勝ち負けだけじゃないんだあって。相手をリスペクトし、純粋にプレーを楽しむ、そして、お互いを思いやる** — 翔平が体現しているものはまさにそれなんだ。翔平のおかげで素晴らしい体験が出来た」。

この「野球は勝ち負けだけじゃない」という言葉は、素晴らしいです。野球は、「勝負」ではなく、二つのチームも、そしてそれぞれのファンも、共に楽しむ「ゲーム」なのですから。

**異邦人同士** その時の一塁手もまた、この大谷の行動にひどく感動しました。彼は、たしか移民してきた選手で、苦勞してメジャーリーガーにのし上がっただけあって、アメリカ人でない大谷が球場中のすべての人たちから絶賛されるのを見ての感慨深い思いでした。彼も、長年、「アメリカ・ファースト」の反移民と怨望と排除と不遇感と疎外感と低所得といったありとあらゆる差別に苦しめられてきたのです。彼にとって翔平は、その意味で英雄です。

## 大きなブランケット騒ぎ

**敵のファンも応援** つづいて、もう一つ感動的な出来事がつづきます。ロウが言った、「レイズファンたちが大谷コールをしていたのです。翔平の顔がプリントアウトしたブランケットを掲げている女性もいました。敵チームの選手に対して、これほどまでの愛情と敬意を表するなんて……」のその女性の事件です。



「4－0」とリードして迎えた4回2死一塁で第3打席が回った時だった。大谷の背後バックネット一塁側に座っていたレイズユニホームを着ている女性は何やら動き始めた。カウント1－1から大谷がファウルを打って打席を外して一塁側に歩き出すと女性ファンは大きく手を広げてブランケット（ベッドシーツのような大きな布）を掲げた。よく見ると大谷の顔が全面にプリントされていた特別仕様。地元メディア「ドジャース・ネーション」のダグ・マッケイン記者も注目したようだ。自身のX（旧ツイッター）を更新し「ショウヘイ・オオタニの巨大なブランケットを持ったファンが最前列に座っている」として画像を添えた。

**大胆な行為** 自分のテリトリーの球場で、相手チームの選手を応援するなど、とても大胆な行為です。それも、かよわい母親と幼い息子です。周りから、どんな眼で見られているか分かりません。時によると、熱烈なレイズ・ファンたちから、ひどい暴力を振るわれるかも知れません。でも、大谷を応援したかったのです。なぜ、そんなに大谷にひかれたのでしょうか？ 一塁手のように、なにか、救いを求めているのでしょうか？

ある記事によると — 「その女性は野球少年(ピッチャー・センター)のお母さんで家族揃ってレイズのファンだけど、大谷選手の大ファンでもある。ハリケーンで家も何もかも失って落ち込んでいるけど大谷選手の50-50に元気付けられている。経済的に余裕がないからドジャースの試合は観に行けないから今回のレイズ戦を楽しみにしていた。ブランケットは自分でプリントしてもらった。試合終了後お母さんと少年は大谷選手と会って大谷選手のサイン入りユニフォームをプレゼントされた」。

**世界の恋人大谷翔平** ここでも、敵軍のファンからも愛される大谷がいます。大多数のアメリカ人を相手に、堂々と一人活躍しつづける大谷の周りは、いまや、「アメリカ・ファースト」ばかりでもないのです。でも、どうして翔平は、なんにおいてもそんなに強いのでしょうか？ むろん、名選手が多いアメリカで、論吉翁がいう「我が学者(野球の選手たち)未熟なるが故に、暫くその名代(お手本)を勤めしむる者なり」である訳ではなく、「野球が上手くて、野球が好きで、人柄がいいから」だけのポピュリズムでもなさそうです。

**勤めるのが尊い** ここでも、報徳先生にご意見を聞けば次のようになるでしょう —

報徳先生はこう言われた — 「天理と人道との差別をよく区別出来る人は少ない。人身があれば欲があるのは天理である。田畑へ草の生ずるのと同じである。堤は崩れ、堀は埋まり、橋は朽ちる。これが天理である。ところが、人道は、私欲を制するのを道とし、田畑の草を取るのを道とし、堤は築き、堀はさらい、橋はかけ替えるのを道とする。このように、天理と人道とはまったく別のものだから、天理は永遠に変化なく、人道は一日怠ればたちまち廃れる。だから、**人道は勤めるのを尊しとし、自然に任せるのを尊ばない。** 人道の勤めるべきは、己に克つという教えである。己というのは私欲である。私欲は田畑にたとえれば草である。克つというのは、この田畑に生ずる草を取り捨てることだ。己に克つというのは、わが心の田畑に生ずる草をけずり取り、取り捨てて、わが心の米麦を繁茂させる勤めのことだ。これを人道という。『論語』(顔淵篇)に、「己に克って礼に復(かえ)る」(自分にうちかって礼の規則にたち帰る)とあるのは、この勤めのことだ」。

【『二宮翁夜話』第六編:人道と天道との別・六頁】

翔平さんは、常に「礼」に返るべく、勤めているのです。ここでの「礼」は、むろん、差別とか区別とか怨望とか仲間外しとかを一切断って、相手を敬う「レスペクト」と相手を先にする「仁」と相手の幸せを願う「ウエル・ビーイング」(well being) のことです。これを行う精神こそ、「日本が第一!」「日本が唯一!」「日本が最高!」とっていいでしょう。おやまた、それでは、自画自賛の「ジャパン・ファースト」となって「秋茄子の味」に逆戻りしてしまいます。

【2025/08/05 都築正道】